

パブリックヒストリーにかかる議論

トマ・コヴァン（徳原拓哉訳）

知識が生み出され、議論され、そしてパブリックと共有される方法に、大きな変化が生じている。研究者が自分の研究を広めるためにソーシャル・メディアを用いている、といった単純な変化ではない。科学や知識の生み出され方に、根本的で学際的な変化が起きているのだ。¹ 知識の生産に関して、自然科学だけではなく、パブリックヒューマニティーズ²、公共考古学、公共社会学、そして公共教育学の分野において、「参与論的転回」³と呼ばれる方向に向かって、明らかな変化が起きている。⁴ イギリスの歴史家、ルドミラ・ヨルダノヴァ（Ludmilla

1 Meinolf Dierkes, Claudia von Grote, *Between Understanding and Trust: The Public, Science and Technology*. London, Routledge, 2000.

2 (訳者注) 本章においても著者が述べているところであるが、“Public”をどのように翻訳するのか、という点については明確な回答がまだない。むしろ、近年のパブリックヒストリーにおいては、“Public”を特定の一つの概念に帰するのではなく、各国や分野に応じた複数の“Public”が存在するという理解がコンセンサスを得つつある。本章では、その点を鑑みて文脈に応じて Public を訳し分けているが、同時にその点については (Public) を付記しておく。

3 (訳者注) 「参与論的展開」(Participatory Turn)とは、解釈や構築において、市民科学における三つのアクター：ユーザー・オーディエンス・パブリックが根本的な作業に関わることを指す。Per Hetland and Kim Christian Schröder, Chapter 9 The participatory turn Users, publics, and audiences, *A History of Participation in Museums and Archives*. Routledge. 2020, London, pp.168-185.

4 Per Hetland, Kim Christian Schröder, “The participatory turn. Users, publics, and audiences”, in Per Hetland, Palmyre Pierroux, Line Esborg (eds.), *A History of Participation in Museums and Archives*. London, Routledge, 2020, pp.168-185. ; Laura Nichols, “Public Sociology”, in Kathleen Odell Korgen (ed.) *The Cambridge Handbook of Sociology*. Vol. 2 Specialty and Interdisciplinary Studies,

Jordanova) は、いまや過去は広く公的資源とみなされ、解釈の題材となっていると述べる。⁵ 誰が過去を所有しているのか。誰が過去を解釈できるのか。そして、社会の中で歴史家が果たす役割を問う重要性は、特にソーシャルメディアの台頭とともににより高まっている。その結果、歴史家たちは自らの役割を、歴史学の外 (public) での議論に照らして再評価している。パブリックヒストリーというフィールドの中で生じてきたのは、そうした議論の一端である。

しかし、近年の盛り上がりにも関わらず、そのフィールドの外にいる人々には、パブリックヒストリーについてまだあまり知られていない。パブリックヒストリーが一般的に知られるようになったのは、1970 年代のアメリカである。しかし、パブリックヒストリーは、歴史学が伝統的に、多様な人々と歴史についてコミュニケーションや共有をしてきたことに、深く関係しているのだ。⁶ このフィールド (パブリックヒストリー) の支持者たちは、歴史が形作られるプロセスを定義し、その範囲を広げ、そして参加者を拡大するための方法として、パブリックヒストリーを捉えた。パブリックヒストリーはその当初、ロバート・ケリーが「アカデミアの外で歴史家を雇用し、歴史学的手法を用いること」と定義づけたように、専門的な訓練を受けた歴史家が直面する雇用の危機に対する解決策のひとつであり、また学問の内と外、双方から歴史に参与する人々を結びつける手段のひとつとなつた。⁷ その結果、大学では学位課程が増加し、全国規模の協会、ジャーナル、種々のイベントも成立した。⁸ パブリックヒストリー

Cambridge, Cambridge University Press ; 2017, pp. 313-321; "The International Centre for Public Pedagogy", <https://www.uel.ac.uk/our-research/research-school-education-communities/international-centre-public-pedagogyicpup>, (accessed 2023-01-24). *Public Archaeology*. vol. 20, 2021; Public Humanities Hub, "Defining the Public Humanities", <https://publichumanities.ubc.ca/about/what-are-the-public-humanities/>, (accessed 2023-01-24).

5 Ludmilla Jordanova, *History in Practice*. London, Bloomsbury, 2006.

6 Thomas Cauvin, "The Rise of Public History: An International Perspective", *Historia Crítica*. 68 (2018), pp. 3-26.

7 Robert Kelley, "Public History: Its Origins, Nature, and Prospects", *The Public Historian*, 1 (1978). p. 16.

8 Thomas Cauvin, "Public History in the United States: Institutionalizing Old Practices" in Paul Ashton and Alex Trapeznik (eds), *What is Public History Globally? Working with the Past in the Present*. London, Bloomsbury, 2019, pp. 145-156.



図1 パブリックヒストリー・プログラムの国際的見取り図

は、アメリカでは制度化された実践の分野として確固たる地位を築いた。過去30年の間に、パブリックヒストリーは世界中で発展した。特にヨーロッパでは、国際パブリックヒストリー連盟(IFPH)⁹が示している見取り図(図1)の通りである。現在では世界各地に、数多くのパブリックヒストリーのプログラム、プロジェクト、カリキュラムが存在している。ブラジル、日本、オーストラリアとニュージーランド、イタリア、スペインでも、全国規模のネットワークや組織が成立している。2022年にはベルリンで「パブリックヒストリー国際会議」(World Congress of Public History)が開催され、世界中から250人以上の参加者が集まつた。アカデミア、アーカイブ、博物館、図書館、メディア、文化センター、学校、地域団体に至るまで、さまざまな分野から歴史家が出席したことは、この分野¹⁰が持つ活力を示した。

パブリックヒストリーの出現と成長は、私たちがどのように過去を保存し、研究し、解釈し、研究し、伝え合い、利用し、消費するのかを取り巻く日常的な空間の変化を反映している。現代社会における歴史と歴史家の役割に関し

9 “International Federation for Public History”, <https://ifph.hypotheses.org/public-history-programs-and-centers>, (accessed 2023-01-22.)

10 “IFPH 2020”, Program, accessed 22 January 2023, <https://www.ifph2020.berlin/program/index.html>, (accessed 2023-01-22.)

て、国的に議論がなされていることが、パブリックヒストリーが訴求力を持ち、成功をしている一因であると考えられる。この分野が世界的に拡大し続いている今、その定義、実践、そして現在どのような議論が行われているのか検討することは時宜を得ている。本章では、パブリックヒストリーにおける最新の議論、特に協働的実践や参加型の実践についての理論と倫理、またそれらが急速に発展しつつあるデジタル・パブリックヒストリーという分野にどのように適用されるかについて掘り下げていく。¹¹

1 パブリックヒストリーの台頭

歴史家のイアン・ティレルは、「学者はパブリックヒストリーをなにか新しいものと見なす傾向がある」が、実際には「歴史家は長い間、公共の問題を扱ってきた」と指摘し、パブリックヒストリーに対する重要な誤解を明らかにした。¹²用語としての「パブリックヒストリー」は新しいかもしれないが、歴史研究をアカデミアの外で共有し、応用するという実践は、古くから確立されていた。歴史家のポール・クネヴェルは、「15世紀イタリアの人文主義的な歴史家たちの活動以来、西洋の歴史学は公的 (public) な機能を持っていた」と論じている。彼は歴史を使って、都市の仲間に對し、重要な市民的義務や、都市国家に住む利点を伝えているという点を以って、ブルーニやギッチャルディーニといった人文主義者を、ヨーロッパ初の「近代的な」パブリックヒストリアンとみなしている。¹³この研究は、幅広い受け手と交流し、公的に関わる (publicly engaged) 歴史家たちが古くから存在していたことを明らかにしている。

しかし、19世紀末から20世紀初頭にかけて歴史学が専門化すると、ヨーロッ

11 Serge Noiret, Mark Tebeau, and Gerben Zaagsma (eds), *The Handbook of Digital Public History*. Berlin, De Gruyter Publishing, 2022.

12 Ian Tyrrell, *Historians in Public: The Practice of American History, 1890-1970*. Chicago, University of Chicago Press, 2005, p.154.

13 Paul, Knevel, “Public History: The European Reception of an American Idea?” *Levend Erfgoed*. 6(2), 2009, p.7. <https://dare.uva.nl/search?identifier=69a5603f-4380-4b50-b686-18558d06a230>, (accessed 2024-07-12.)

パでは結果として、専門的な歴史家と受け手との関係も変化した。歴史学が科学的かつ専門的なディシプリンとなると、学術雑誌が普及の手段として好まれるようになった。ドイツの歴史家レオポルト・フォン・ランケに触発され、専門的な歴史家は、歴史家の生きている時代の一般的な考察からは距離をとって、事実に基づいて歴史の語りを作ろうとした。¹⁴ 彼らは、学術的な仲間という特定の受け手を読者とするようになり、一般的な文体からは遠ざかっていった。この専門化は、ある種の孤立を助長した。パブリックヒストリー運動の創始者たちが対抗しようとしていたのは、この種の孤立だった。

専門的な歴史学の特殊化に呼応して、パブリックヒストリーは、1970年代に、歴史のつくられた (History-Making) を変革しようとする広範な国際的運動の一環として発展した。ジェームズ・ガードナーとポーラ・ハミルトンは、「アメリカではパブリックヒストリーという言葉や概念の歴史が、アメリカの使者が世界の他の国々に対して、実践としてのパブリックヒストリーを紹介するという、国内向けの話として語られている。実際には、1970年代から1980年代にかけて、多くの西洋諸国が、似たような形で方法論の拡大を経験した。こうした方法論の拡大は、遺産に関わる職業の専門職化、歴史解釈の拡大、さらにオーラルヒストリー運動という、より広範なコミュニティ・プロジェクトを促進した」とはっきり述べている。¹⁵ 実際、1960年代から1970年代にかけてのイギリスでは、すでに一部の歴史家が市民参加型の実践を展開するなど、市民参加に向けた新しいアプローチが出現していた。¹⁶ 歴史家のラファエル・サミュエルはラスキン・カレッジにヒストリー・ワークショップを設立し、歴史研究と歴史の利用を民主化し、社会の中で可視化されない人々の声を伝えることを目ざした。彼のアプローチは、「アカデミックな歴史の権威を弱め、それによって歴史の研究と利用の民主化を

14 Peter Novick, *That Noble Dream: The 'Objectivity Question' and the American Historical Profession*. Cambridge, Cambridge University Press, 1988, p. 43.

15 James B. Gardner and Paula Hamilton, *The Oxford Handbook of Public History*. Oxford, Oxford University Press, 2017, p. 4.

16 Holger Hook, "Introduction", *The Public Historian*. 32(3), (Summer 2010), pp. 7-24.

進めたいという願望¹⁷」から生まれたものだ。ティレルは、アメリカとイギリスの歴史実践を比較し、「イギリスの伝統は、民衆や労働者階級が自分たちの歴史的経験を記録することを促進した。そしてそのプロセスには、労働組合、労働者教育、地方史グループが大きく貢献していた。」と説明している。このように、パブリックヒストリーの台頭は、単に北米だけの現象ではなく、歴史の作られ方や交流のされ方を刷新しようとする、より広範な運動であった。とはいっても、パブリックヒストリーの運動が当初最も成功したのはアメリカであったことは確かである。

1970年代、カリフォルニア大学サンタバーバラ校で「パブリックヒストリー」という言葉を最初に作ったのはロバート・ケリーである。環境史家、コンサルタント、水利権に関する専門家証人として、ケリーは歴史学の専門職をアカデミアを超えた実践的な応用に広げようと望んだ。彼は、「パブリックヒストリーとは、アカデミアの外で歴史家や歴史学的手法を採用することを指す」と書いている。¹⁸同じく運動の創設メンバーであるウェスリー・G・ジョンソンによれば、パブリックヒストリヤンを養成することは、アカデミックな歴史家の孤立に対する一つの答えであったという。彼は、「歴史協会や公共 (public) の場ではなく、アカデミーが歴史家の住処となり、文字通り象牙の塔に引きこもるようになった」と説明した。¹⁹この運動は実践的で、歴史家の職域を多様化するために教育以外のキャリアを提案した。1976年、カリフォルニア大学サンタバーバラ校にパブリックヒストリーの最初の大学院プログラムが設立され、その2年後にはウェスリー・G・ジョンソンによって学術雑誌 *The Public Historian* が出版された。さらに1979年には全米パブリックヒストリー協会 (National Council on Public History, NCPH) が設立されて、パブリックヒストリーが研究分野として制度化されたことが、米国でのパブリックヒストリー運動の統一性の一端を説明できるだろう。²⁰

17 Bernard, Jensen, “Usable Pasts: Comparing Approaches to Popular and Public History”. Kean, H.; Ashton, P. (eds), *Public History and Heritage Today. People and Their Pasts*. London; New York, Palgrave Macmillan, 2012, p. 46. https://doi.org/10.1057/9780230234468_3. (accessed 2024-07-12.)

18 Tyrrell, *Historians in Public*. p. 157.

19 Kelley, *Public History*. p. 16.

20 Wesley G. Johnson, “Editor’s Preface,” *The Public Historian*. 1(1), 1978, p.6.

21 Wesley G. Johnson, “The Origins of the Public Historian and the National Council on Public

パブリックヒストリーは当初アメリカで制度化され、しばしばアメリカ由来の概念として理解されているが、世界中の他の複数の地域でも共鳴した。1984年、フランスの歴史家アンリ・ルソーは「アメリカで生まれたパブリックヒストリーは、大西洋を横断している。これは歴史の未来なのだろうか？」と推論している。²² 1990年代には、オーストラリアのグレアム・デイヴィソンが、パブリックヒストリーは大半がアメリカの動きから情報を得ていると論じている。²³ 確かに、しばらくの間パブリックヒストリーは主に英語圏の国々に留まっていた。ウェスリー・G・ジョンソンは、国際的なイベントを通じて、パブリックヒストリーの多様な理解と実践を橋渡ししようとした。1981年から1983年にかけて、彼はヨーロッパとアフリカで数回の国際ツアーを行い、パブリックヒストリーの要素を持つさまざまなプログラムを紹介し、歴史を現代の問題に応用している歴史家たちと対面した。²⁴ イギリスの歴史家アンソニー・サトクリフは1980年に彼と出会い、すぐに「北米のパブリックヒストリーと都市史は、互いに理解可能で共感できる」と考えた。サトクリフは、「パブリックヒストリーと、経済社会史という学問分野との間に、建設的な共通の関心を持つ可能性を感じた。イギリスに特徴的なことだが、社会経済史は、パブリックヒストリーの視点の一部をすでに認めていた。」と説明している。²⁵ このように、パブリックヒストリーは当初から他分野との相互の乗り入れがあった。にもかかわらず、ヨーロッパでこの分野が本格化したのは、2000年代に入ってからだった。

1980年代の国際化の過程は、アメリカで生まれた特定のアプローチを広めようとする試みがほとんどだったが、2000年代にはそれとは異なる新たな関心の波が押し寄せてきた。2011年に設立された国際パブリックヒストリー連盟

History" *The Public Historian*. 21(3), Summer 1999, pp.167-179.

22 Henry, Rousso, "L'histoire appliquée ou les historiens thaumaturges", *Vingtième Siècle*. 1 (1984), p.105.

23 Graham, Davison, "Public History". Davidson, G.; Hirst, J.; MacIntyre, S. (eds), *Oxford Companion to Australian History*. Melbourne, Oxford University Press, 1998, pp. 532-535.

24 Wesley G. Johnson, "An American Impression of Public History in Europe", *The Public Historian*. 6(4), Fall, p.91, 95. <https://doi.org/10.2307/3377384>, (accessed 2024-07-12.)

25 Anthony, Sutcliffe, "The Debut of Public History in Europe", *The Public Historian*. 6(4) (1984), p.9.

は、種々のパブリックヒストリーのプロジェクト、専門家たち、学生たち、実践家たちを世界規模で結びつけることを目的としている。また、*Public History Review*、*International Public History*、*Public History Weekly*などの査読付きジャーナルも登場していることから、この分野が国際的に認知されつつあることがわかる。²⁶ また、²⁷ ブラジル (Rede Brasileira de História Pública)、イタリア (Associazione Italiana di Public History、AIPH)、そして最近では日本 (パブリックヒストリー研究会) でも全国規模のパブリックヒストリー協会が設立され、パブリックヒストリーが拡大していることがわかる。さらに、英語、ポルトガル語、イタリア語、ドイツ語、ポーランド語、中国語、スペイン語、日本語の教科書、論文集、ハンドブック、手引き書などが出版社から提案されている。

2 歴史を（より）パブリックに

2.1 分野を定義する

パブリックヒストリーを定義することは明らかに困難な作業である。「パブリック」と「歴史」という、共につかみづらい概念を、一つの傘概念の下で同時に扱うことになるからだ。²⁸ 例えは、「パブリックヒストリー」という言葉の翻訳をめぐっては、現在も議論が続いている。フランス語、ポルトガル語（ブラジル）、オランダ語などでは、それぞれ *Histoire Publique*、*História Pública*、*Publieksgeschiedenis* と訳されているが、イタリアパブリックヒストリー学会 (AIPH) やドイツの一部のプログラムでは、英語の表現を維持することを選択した。例えはイタリアでは、国際的なネットワークへの接続を容易にするために、

26 *The Public Historian*, <https://tph.ucpress.edu>, (accessed 2024-07-12.); *Public History Review*, <https://www.uts.edu.au/public-history-review>, (accessed 2024-07-12.); *International Public History*, <https://www.degruyter.com/view/j/iph>, (accessed 2024-07-12.); *Public History Weekly*, <https://public-history-weekly.degruyter.com>, (accessed 2024-07-12.)

27 *Rede Brasileira de História Pública* (“Rede” – RBHP) のウェブサイト, <http://historiapublica.com.br>, the AIPH のウェブサイト (<https://aiph.hypotheses.org>) そして、日本のパブリックヒストリー研究会のウェブサイト (<https://public-history9.webnode.jp>) を参照。

28 Jordanova, *History in Practice*. p. 149.

英語表記を維持することが決定された。²⁹ セルジ・ノワレ (AIPH 会長) は、「イタリアでは個人がこの分野にオープンで、他国からソリューションを輸入し、現地に合わせて最適化することに全く問題がない」一方で、イタリア語でパブリックヒストリーを意味する *storia pubblica* という言葉は、過去に物議を醸したことがある用語のことだと理解されるだろうと述べた。³⁰ フランス語の場合、福祉国家の長い歴史があるため、「パブリック」という言葉が国家や行政との密接な関係を示唆することがあり、翻訳にあたって特有の問題がある。その結果、「パブリックヒストリー」が、国家が支援する歴史、あるいは国家行政の歴史とさえ認識される可能性もある。

パブリックヒストリーを定義づけることは問題含みだ。全米パブリックヒストリー協会がパブリックヒストリーの専門家を対象に行った 2009 年の調査に基づき、ジョン・ディヒテルとロバート・タウンゼンドは、「パブリックヒストリーは歴史についての専門的実践の中でも最も理解されていない分野の一つである。なぜなら、その仕事の大半がアカデミアの外にあるからだ。」と書いている。³¹ パブリックヒストリーがより国際的になりつつあることは明らかだが、この分野を定義することは依然として困難であり、議論の余地が残っている。例えば、2020 年パブリックヒストリー国際会議 (World Conference of Public History) のウェブサイトには、パブリックヒストリーの定義を全く記載していない。国際パブリックヒストリー連盟は、国際的なパブリックヒストリーを「世界中のさまざまな種類の受け手のために、公私のさまざまな場面で歴史に関わる仕事を行う

29 2017 年 6 月 4 日、イタリア、ラヴェンナでのキアラ・オッタヴィアーノ (AIPH 理事) へのインタビューに基づく。

30 Interview with Serge Noiret (President of the AIPH), Florence (Italy), 28 July 2017. 2017 年 7 月 28 日、イタリア、フィレンツェでのセルジ・ノワレ (AIPH 会長) へのインタビューに基づく。

31 John Dichtl and Robert Townsend "A Picture of Public History: Preliminary Results from the 2008 Survey of Public History Professionals". *Public History News*. 29 (4), September, 2009. <https://www.historians.org/publications-and-directories/perspectives-on-history/september-2009/a-picture-of-public-history> (訳者注：原著記載 URL はアメリカ歴史学協会 (AHA) 発行の Perspectives on History に掲載された同名記事である。Public History News の URL は <https://ncph.org/phn-back-issues/> である。)

専門家からなる歴史科学の分野」とだけ示している。パブリックヒストリーの国際化が進んでいるにもかかわらず、この分野の厳密な定義はまだない。2008年に発表された論文“Defining Public History : Is It Possible? Is it Necessary?”では、ロバート・ワイブルが「25年以上も前からパブリックヒストリーの話を聞いてきたにも関わらず、歴史家が『パブリックヒストリー』が実際のところ何を意味するのかを、未だ曖昧にしているのは少し気まずい。パブリックヒストリーを一意に定義することについてコンセンサスを求めるることは、無意味なのかもしれない。」³²と指摘している。厳密な定義ではなく、この分野における主な基準について議論する方が適切だ。

2.2 現在の中の過去：相互に関連する構造

パブリックヒストリーの決定的で厳格な定義を試みるよりも、「パブリック」と「ヒストリー」という用語を関連付けることの意味を理解することがより有益である。そのためには、パブリックヒストリーの可能性を探るための国際的な議論、交流、協力が必要である。イタリアの歴史家マルチェロ・ラヴェドゥトは、アカデミアという陸地からパブリックヒストリーという群島への横断、という比喩を提示している。³³ 彼は、パブリックヒストリーが小さな島の集まりのように、異なりつつも互いに結びついた実践から構成されていることを、群島という言葉で表現している。この比喩は、パブリックヒストリーを、歴史のプロセスに対する共有された理解によって、ひとつに結びついた断片的な分野として捉えたいという願望を表している。重要なのは、パブリックヒストリーは従来からある歴史学的プロセスを拡張し、特定の実践を通じて「陸から群島へ」移動するものである。

32 International Federation for Public History, accessed 23 March 2023, <https://ifph.hypotheses.org>, (accessed 2023-03-23).

33 Robert Weible, “Defining Public History: Is it Possible? Is it Necessary?” in *Perspectives on History*, 1 March 2008.

34 Marcello Ravveduto, “Il viaggio della storia: dalla terra ferma all’arcipelago”, in Farnetti, Paolo Be rtella, Bertucelli, Lorenzo and Botti, Alfonso (eds), *Public History. Discussioni e pratiche*. Milan : Mimesis, 2017, p. 136.

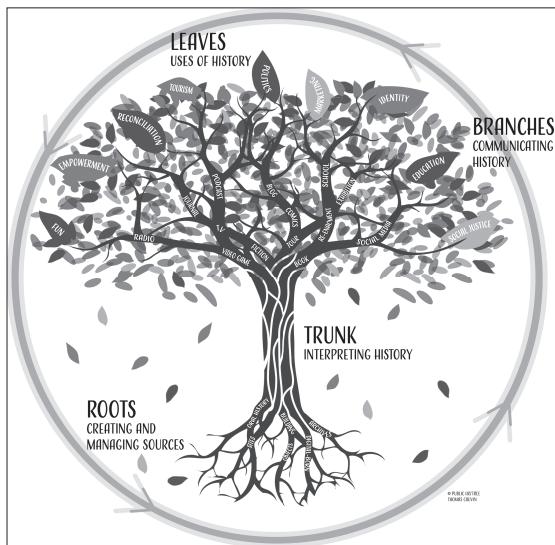


図2 パブリックヒス「ツリー」

実践に焦点を当てることは、英語版ウィキペディアの定義にも表れている。「パブリックヒストリーは、歴史学の分野で何らかの訓練を受けた人々が、一般に専門的な学問的環境の外で行う広範な活動である [...] 幅広い実践を取り込み、多くの異なる環境で行われるため、厳密に定義されることには抵抗がある。」³⁵しかし、これらの実践がどのように結びついているのかという疑問は残る。

木というものは、象徴やメタファーとして頻繁に利用されてきた。系譜学の協会も歴史学科も、過去（ルーツ=根）と現在のつながりを示すために木のイメージを利用している。また、木という表現で、パブリックヒストリーは、相互に関連した部分からなる一つのシステムとして紹介されることもあるかもしれない。その場合、木は単にパブリックヒストリーのアクターだけを示しているのではなく、ひとつのプロセスの中の複数の段階を表わすものとなる。木は、アクター同士の間の競合や対立の関係というよりも、各部分同士の必要不可欠な相互接続の上に構築される（図2）。各部分は異なっていても、全体的なシステム

³⁵ Wikipedia, "Public history", https://en.wikipedia.org/wiki/Public_history, (accessed 2022-01).

の一部であり、互いなしには存在し得ない。歴史学は伝統的に、一次史料を徹底的に批判的に解釈すること(幹)と定義されてきたが、パブリックヒストリーは、アーカイブ、博物館学、文化遺産、コミュニケーション、メディア研究、パフォーマンス、観光、仲介など、他の実践や分野と、より包括的に関連している。パブリックヒストリーは、歴史をより身近なものにするために、学際的かつ協働的な枠組みで、異なる分野の専門家とともに実践されることが実に多い。訓練を受けた歴史家は、アーキビスト、キュレーター、コレクション・マネージャー、保存修復家、図書館員、メディア専門家、デザイナー、ウェブサイトの管理者、その他の一般市民(public)と協力することができる。

パブリックヒストリーは、単なる一次史料の解釈の域を超えたものだ。木の根は史料の作成と保存、幹は史料の分析と解釈、枝は解釈の伝達、葉は解釈の多様な公共利用を意味する。幹がすべての歴史研究に共通するものだとすれば、枝は、パブリックヒストリーがいかにさまざまなパブリックとのコミュニケーションを目指しているかを示している。歴史家は、たとえそれが少数の専門家からなるニッチなものであったとしても、常に受け手を持っている。しかし、パブリックヒストリーは、歴史家に対して多様なメディア、木の枝を通して、多くの、しばしば歴史学の外にいる受け手とコミュニケーションするように後押ししている。パブリックヒストリーは、書籍、学術雑誌、一般誌誌、展示、ラジオ・テレビ放送、映画、ツアー、コミックス、フェスティバル、アプリ、ソーシャルメディア、ポッドキャストなど、さまざまなメディアを通じて伝えられる。さまざまな受け手との交流は、パブリックヒストリーの実践者に自分たちのアプローチを振り返らせ、専門用語や概念重視のアカデミックなスタイルから、ユーザー・フレンドリーで人々を惹きつける(engage)スタイルへと変化させる。各パーツが相互に関連すればするほど、パブリックヒストリーはより強固で首尾一貫したものになる。その構造は直線的ではない。用途(葉)が、私たちが収集し保存することが重要だと信じるもの(根)に頻繁に影響を与えることもある。パブリックヒストリーが表現しているパブリックヒストリーは、純粋に直線的なプロセスとしてではなく、むしろ相互に依存したシステムとして認識されるべきなのだ。

3 共有されたオーソリティ（Shared Authority）と参加型の実践

3.1 理論と実践の間にあるパブリックヒストリー

パブリックヒストリーの国際化は、この分野にあるさまざまなアプローチや理解に光を当てた。そのため、この分野をより理論的に理解したがる歴史家もいる。1984年には、フランスの歴史家アンリ・ルソーが、フランスとアメリカの実践を比較しながら、「プラグマティズムはフランス人の資質（あるいは障害）はない。」と強調することで、北米の歴史家たちが——過剰なほど熱心に——³⁶公共的 (public) な実践に駆り立てられすぎているかと示唆した。彼は、パブリックヒストリーを発展させる前に、フランスの歴史家は主な理論的議論に向合う必要があると考えていたのだ。最近では、ポーランドのヴロツワフ大学での国際ワークショップにおいて、デイヴィッド・ディーン、ジェローム・デ・グルート、コード・アレンデスが、「パブリック」と「歴史」という言葉、そして両者の関連をより理論化する必要性を強調した。³⁷

パブリックヒストリーの理論化の欠如という認識は、部分的には正しい。パブリックヒストリーに関する多くの大学の研修プログラムでは、この分野への理論やアプローチについて論じるための入門的なコースが設けられている。歴史家の中には、この分野をより理論的に理解することを求める人もいるが、理論と実践を対立させず、むしろ自己反省的な実践の発展を支援するよう勧める人もいる。李娜 (Li Na) は、中国のパブリックヒストリーに関する論文の中で、「パブリックヒストリーは、創発的かつ反省的な実践として、従来の歴史教育に対して効果的な介入を構成している」と論じている。彼女は「パブリックヒストリーは反省的である。それは行動の結果、行動そのもの、そして行動に内在する直感的な知に、対話的に焦点を当てる傾向があるためだ。」と説明している。この自己反省的な

³⁶ Rousse, "L'histoire appliquée", p. 114.

³⁷ Applied European Contemporary History, "The Public in Public and Applied History", University of Wrocław, March 2019, <http://aec-history.uni-jena.de/>

³⁸ Na Li "Public History: The Future of Teaching the Past in China" in *Public History Review*, Vol. 29, 2022, <https://epress.lib.uts.edu.au/journals/index.php/phrj/article/view/7859/7921>, (accessed 2023-

実践は、一般市民（public）の協働や参加に対処するために重要である。

パブリックヒストリーにおける「パブリック」という言葉は、これまで多くの議論や討論の対象となってきた。この用語は英語では簡単に理解できるが、他の言語での翻訳は困難である。例えば、日本のパブリックヒストリー研究会の会員とパブリックヒストリーについて議論した際には、翻訳者が私の議論の中の「パブリック」という用語を訳すのに苦労していた。似た事例として、ポーランドのプログラムでは、「パブリックヒストリー」を「公共空間の歴史」と訳すことを選択したものもある。³⁹ 2002年、ジル・リディントンは、ユルゲン・ハーバーマスによって広められた公共圏に関する理論的議論と、パブリックヒストリーを結びつけるべきだと述べた。⁴⁰ ハーバーマスは、公共圏を、私的な個人が公共として集まり、社会のニーズを国家に明示することで構成される仮想または想像上の共同体と定義した。ハーバーマスは、新聞、コーヒーハウス、サロン、劇場など、さまざまなコミュニケーション・メディアを通じて、議論する公衆が出現することを強調した。しかし、ハーバーマスの「公共」という言葉の使い方にも批判があり、公共圏の概念にも疑問が呈されている。過去をどのように解釈し、表現するかについての複数の視点と継続的な議論を認識するために、「パブリック」ではなく「パブリックス」という用語を使用することを提案している学者たちもいる。⁴¹ 政治学者たちがこのアプローチに影響を与えている。例えば、フレイザーは、「パブリックの多様性」を主張している。⁴² さらに、支配的かつ公的な語りの存在と、それに対する挑戦は、異なるパブリックの間に文化や権力へのアクセスの不平等や、過去の解釈の争いが存在してきたことを学者たちが認め、「カウンターパブリック」に言及するように促した。⁴³ フレイザー

03).

39 Joanna Wojdon, *Historia w przestrzeni publicznej*, Warsaw : Wydawnictwo Naukowe PWN, 2018.

40 Jill Liddington, "What is Public History? Publics and Their Pasts, Meanings and Practices." In *Oral History*. 30/1 (Spring 2002), p. 89.

41 David Dean, "Publics, Public Historians and Participatory Public History", in Joanna Wojdon and Dorota Wisniewska, *Public in Public History*. (New York, 2022), pp. 1-19.

42 Nancy Fraser, "Rethinking the Public Sphere: A Contribution to the Critique of Actually Existing Democracy", Craig Calhoun ed. *Habermas and the Public Sphere*. Cambridge, MA, London: MIT Press, 1992, pp. 109-142.

43 Michael Warner, *Publics and Counterpublics*. New York, Zone Books, 2002.

によれば、カウンターパブリックとは、従属的な社会集団に所属し、自分たちのアイデンティティ、利益、ニーズについて対抗的な解釈を展開するための、対抗的な言説を作り、流通させる人々のことである。こうした議論は、対立する語りがどのように認識されるのか、単一で包括的なパブリックではなく、複数のパブリックスという概念の適用にどうすれば至ることができるのかといった点に影響を与えている。⁴⁴

こうした議論は、パブリックヒストリーにも影響を与えている。デイヴィッド・ディーンは *Companion to Public History* の序文で、「この分野の人々はパブリックを単数で (the public) を語る傾向があるが、パブリックヒストリーの受け手の多様性と複雑さを考えると、複数のパブリック (publics) について考える方がより有益であると主張したい」なぜなら、「単数のパブリック (the public) ではなく複数のパブリック (publics) について語ることは、歴史表象の分析をするときや、パブリックヒストリーにおける主体性の問題について語るときに、ニュアンスを持たせる」からだと述べている。⁴⁵ 私たちはパブリックを単一の概念として捉えるのではなく、パブリックヒストリーに参加するさまざまな「パブリックス」——グループ、アクター、パートナー——を考慮すべきなのだ。このことは、私たちがどのように、そして誰とコラボレーションするかに直接影響する。

3.2 共有されたオーソリティ (Shared Authority) と訓練された歴史家の役割

パブリックヒストリーの登場とその協働的なアプローチは、我々に歴史の創造に関わる個人の役割の再考を促している。パブリックヒストリーでは、一般市民は受動的な聴衆ではなく、しばしばプロジェクトに参加し、関与する。このダイナミズムを探求するための一つの出発点は、パブリックヒストリーとオーラルヒストリーの関係、特に参加者の役割について考えることである。マイケル・フリッシュの 1990 年の著書 *A Shared Authority: Essays on the Craft and Meaning of Public History* は、権威と専門性を再定義する必要性を強調するものである。⁴⁶ フ

44 Fraser, "Rethinking the Public Sphere".

45 David M. Dean, *A Companion to Public History*. New Jersey: Wiley Blackwell, 2018, pp.3-4.

46 Michael Frisch, *A Shared Authority: Essays on the Craft and Meaning of Oral and Public History*.

リッシュは、オーラルヒストリーに存在する語り手と聞き手という二重の権威を強調し、共有されたオーソリティ (Shared Authority) という概念が、歴史家に対して、過去の解釈にさまざまなアクターが参加することを再評価させていると示唆している。フリッシュによる共有されたオーソリティの呼びかけは、文化遺産における権威や専門性を再評価する動きが広がる中で生じた。公共政策や博物館学を含む他の分野では、共同制作や市民科学といった参加型の方法論とともに、多様なレベルの市民参加が強調されてきた。例えば、ニーナ・サイモンの「参加型博物館」というコンセプトは、一般の人々の交流や関与が、ミュージアムの来館者を知識創造への積極的な参加者に⁴⁷変えると説明している。

共有されたオーソリティは広い概念であるが、各参加型プロジェクトが効果的であるためには、透明性と、参加者の具体的な役割が確立されている必要がある。すべてのプロジェクトのすべての段階が参加型である必要はない。種々のプロジェクトを、参加型かそうでないかで分類するのではなく、さまざまな段階における参加について考えることがより有効である。例えば、市民科学においては、「貢献型」(市民科学者がデータを収集する)、「協働型」(参加者も追加の作業を行う)、「共創型」(参加者がプロジェクトの全段階に関わる)の三つの参加レベルが想定されている。⁴⁸ 同様に、ニーナ・サイモンは、博物館における参加の、多様な度合いを表すピラミッドを作成した(図3)。⁴⁹ それぞれの段階において、異なるスキル、専門知識、参加者に対する要件が必要とされる。ここでは、プロセスの各段階を通じて、一般市民の参加と、厳密で批判的な方法論のバランスを見つけることが重要な課題となる。

パブリックヒストリーの出現は、訓練を受けた歴史家に、自身の役割の再評価

Albany, SUNY Press, 1990.

47 Nina Simon, *The Participatory Museum. Museum 2.0*. <http://www.participatorymuseum.org>, 2010.

48 Rick Bonney, Caren B. Cooper, Janis Dickinson, Steve Kelling, Tina Phillips, Kenneth V. Rosenberg, Jennifer Shirk, "Citizen Science: A Developing Tool for Expanding Science Knowledge and Scientific Literacy", *BioScience*. 59(11), December 2009, pp. 977–984.

49 Nina Simon, "Hierarchy of Social Participation", in Museum 2.0 (20 March 2007), [http://museumтво.blogspot.com/2007/03/hierarchy-of-social-participation.html](http://museumtво.blogspot.com/2007/03/hierarchy-of-social-participation.html), (accessed 2022-09-09). ただし、出典画像に若干の修正を加えてある。

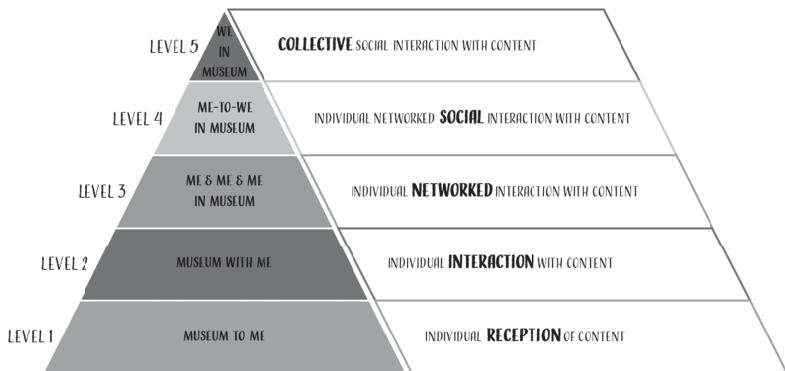


図3 博物館へのさまざまなレベルの市民参加

を求める。その発展には、訓練を受けた歴史家だけでなく、他のアクターも関与している。また、歴史が個人、コミュニティ、グループ、組織、省庁、政府によつていかに利用され消費されるかという問い合わせが含まれている。権威の共有化と市民参加は、訓練された歴史家が権威を失ったり、公的な議論への関連性が減少するということを意味しない。歴史家は共有されたオーソリティを自分の専門知識の放棄と認識すべきではない。歴史学の批判的方法論はパブリックヒストリーに欠かせないものであり、歴史家の公的参加は歴史相対主義には帰結しない。言い換えば、参加型の歴史構築は、過去に対するすべての解釈が真実であるとか、あるいは等しく有効であるということを意味しないのだ。アメリカの歴史家で、パブリックヒストリーの経験が豊富なジム・ガードナーは、意見と知識を区別することを強調している。パブリックヒストリーはそのうち後者に属しており、知識は根拠と方法論に基づいて構築されているという。⁵⁰ 警戒が必要なのは、歴史家のメアリー・リゾが、共有されたオーソリティのリスクに関する論文で述べるとおり、特に参加が、歴史家を完全に舞台裏に追いやったり、目撃者や参加者の目に触れなくなる場合だ。⁵¹ 訓練された歴史家は批判的方法論を提供し、他の参

50 James B. Gardner, "Trust, Risk and Public History: A View from the United States", in *Public History Review*, 17, 2010, <https://epress.lib.uts.edu.au/journals/index.php/phrj/article/view/1852>, (accessed 2024-07-12.)

51 Mary Rizzo, "Who Speaks for Baltimore: The Invisibility of Whiteness and the Ethics of Oral

加者はさまざまな参加の段階において、専門知識を提供する。

協働型のアプローチは、役割は異なるものの、訓練された歴史家の重要性を強調する。歴史家だけが議論をコントロールしているわけではない。訓練された歴史家は、一般の人々 (public) が過去を理解するのを助けると同時に、協働的な実践の確立を助けることができる。受動的な聴衆に知識を与える宣教師として務めるのではなく、歴史家は過去を議論し解釈するための協働的な枠組みの構築に貢献することができるだろう。2006年、バーバラ・フランコは、「市民対話における歴史家や学者の役割は、事実を記録したり、首尾一貫した論文を達成することよりも、意見の対立ができる、安全な場所を作ることに焦点を当てなければならない」と指摘している。⁵² これは市民対話だけでなく、パブリックヒストリー全般にも当てはまる。パブリックヒストリーは、歴史家の役割を矮小化するものではなく、むしろ歴史家が一般市民と向き合い、対話する新鮮な機会を提供するものなのだ。歴史家は、参加者全員が歴史の収集、分析、解釈、伝達のスキルを学び、実践し、共有できるような共同スペースやプロジェクトの確立に取り組むことができる。そしてそれに成功すれば、パブリックヒストリーは、過去に対する批判的かつ方法論的な理解を維持しながら、知識生産の民主化に貢献することができるのだ。

4 デジタルパブリックヒストリーは、この分野の未来なのか？

4.1 デジタル時代のパブリックヒストリー

デジタル技術の登場は、他の分野と同じように、パブリックヒストリーに革命をもたらした。1993年にワールド・ワイド・ウェブがオープンして以来、歴史家は自分たちの研究をより多くの人々に広めることができる新しいプラットフォームを手に入れたのである。しかし、デジタル技術がパブリックヒストリー

History Theater", *The Oral History Review*. Vol. 48, 2021, <https://www.tandfonline.com/doi/full/10.1080/00940798.2021.1943463>, (accessed 2024-07-12.)

52 Barbara Franco "Public History and Civic Dialogue", *OAH Newsletter*. 34(2), May 2006, p. 3.

に与えた影響は、単に歴史研究を広く伝えるだけにはとどまらない。歴史的知識の創造における市民の参加の役割を再考する上でも、大きな役割を果たした。歴史家と他のアクターとの協働を重視する共有されたオーソリティの概念は、Web 2.0 技術の登場によって注目を集めようになった。⁵³ 2000 年代初頭以降、Web 2.0 技術の普及により、クラウドソーシングや市民科学のプロジェクトを通じて、ユーザーが簡単にコンテンツを作成、編集、共有できるようになった。これにより、一般市民が歴史的な文書やコレクションの調査や解釈に貢献する、新しい協働作業の実践が生まれた。

デジタル技術によって促進された協働的実践は、パブリックヒストリーの景観を一変させた。人々の参加に向けた魅力的 (engaging) な機会が生まれ、同時に歴史家の役割について新たな議論が必要とされるようになった。ジム・ガードナーとポーラ・ハミルトンは、「パブリックヒストリアンや一般的な歴史家のうち、自分たちが研究成果を発表している新しいメディアについて考察し、それが研究や発表のための『新しいツール』だという考えを超えて、伝えられる内容をどう変えるのかについて考えている人はほとんどいない」と残念がっている。⁵⁴ 最近の書籍ではこの問題を検討しているものもあるが、新しいテクノロジーの使用によって、公共的次元と歴史の制作の両方がどのように変化するのかを含め、デジタルパブリックヒストリーのさらなる概念化が必要だろう。私たちに必要なのは、デジタルパブリックヒストリーのより良い概念化である。ハヌ・サルミは、デジタル・ヒストリーに関する最近の著書で、デジタルヒストリーの公共的側面 (public dimension) を認めつつも、デジタルパブリックヒストリーを「過去を提示すること」と定義するのみにとどまっている。⁵⁵ メディアの問題に加えて、セルジ・ノワレは、デジタルパブリックヒストリーとは実際、「インタラクティブなデジタルの手段を用いて、公共圏 (public sphere) で歴史を生産す

53 Bill Adair, Benjamin Filene, Laura Koloski, (eds), *Letting Go?: Sharing Historical Authority in a User-Generated World*. New York, Routledge, 2011.

54 Gardner and Hamilton, *The Oxford Handbook of Public History*. p. 13.

55 Hannu Salmi, *What is digital history?*. Cambridge/Medford, PA., Polity Press, 2021, p.80.

ること」だと主張している。⁵⁶ 最近出版された *Handbook of Digital Public History* がそうであるように、メディアや技術について探究するというよりも、新しい技術の利用が、歴史の生産と「公共的側面」の両方をどのように変えるかを検討する必要がある。⁵⁷

デジタルパブリックヒストリーの中心には、まだ多様なパブリックが存在している。2016年の "Public, First" と題する論文で、シーラ・ブレナは、「プロジェクトや研究がオンラインで利用可能であったとしても、そのことがその成果を本質的にデジタルパブリックヒューマニティーズやパブリックデジタルヒューマニティーズにするものではない」と述べる。彼女は、「どのような種類のパブリックデジタルヒューマニティーズの仕事をするにしても、完了したプロジェクトを外部に発信するずっと前に、デザインだけでなく、アプローチやコンテンツにおいても、受け手のニーズを特定し、受け手を招き入れ、その参加に対処するための決定を、プロジェクトの初期から意識的に行っておく必要がある」と論じている。⁵⁸ デジタルパブリックヒストリーには、参加に対する自覚と行動が必要となる。例えば、1994年に設立された歴史とニューメディアセンターの使命は、「デジタルメディアとコンピュータテクノロジーを使って、多様な声を組み込み、多様な慣習に接触し、一般の人々による提示、そして一般の人々が過去を保全し提示することによって、歴史を民主化する」というものだった。⁵⁹ このことは、デジタルパブリックヒストリーが、テクノロジーをめぐる論争を超えたものであることをよく示している。

4.2 参加について再考する

ユーザー同士の関係を刷新しながら、インターネットは、異なる場所にいる

56 Serge Noiret, "DPH: bringing the public back in", *Digital and Public History*. (31 May 2015), <https://dph.hypotheses.org/746>, (accessed 2024-07-12.)

57 Noiret, Tebeau, Zaagsma (eds), *Handbook of Digital Public History*. 2022.

58 Sheila A. Brennan, "Public, First", *Debates in Digital Humanities*. (2016), "32. Public, First | Sheila A. Brennan" in "Debates in the Digital Humanities 2016" on *Debates in the DH Manifold* (cuny.edu).

59 Roy Rosenzweig Center for History and New Media, "About", website, 2021, <http://chnm.gmu.edu/about/>, (accessed 2024-07-12.)

人々をつなぐグローバルなネットワークを提供し、新たなデジタルコミュニティを作り上げている。ノワレは、「過去の解釈における時空間やローカル／グローバルの障壁を破壊することが、デジタルパブリックヒストリーを特徴づけている」と述べている。⁶⁰ Facebook の歴史グループのようなソーシャルメディア上のプラットフォームの事例では、プロジェクトに参加する前は、ほとんどの投稿者 (contributors) がお互いを知らなかった。レベッカ・ウインゴ、ジェイソン・ヘラー、ポール・シャデワルドは、デジタル・コミュニティとの関わり方の新たな実践として、「デジタル・ツールを使うことによって、それまで自分たち自身が一つのコミュニティなのだと認識していなかった人々を結びつける」プロジェクトの存在に着目している。⁶¹ 例えば、ノワレは Herstories から「スリランカの母親の証言が、ソーシャルネットワークからの支援とデジタルオーラルヒストリーのアーカイブの公開によって、国際的な広がりを見せており」⁶² と引用している。このデジタルプロジェクトは、「2014 年にトロントで行われた展示を生み出し」、来場者のコメントを後に展示サイトで公開している。

デジタルパブリックヒストリーは、市民科学やユーザー主導型コンテンツに関するより広範な議論を反映している。市民科学、すなわち「科学的研究における一般市民の参与」は、知識の生産と密接な関係を持っている。欧州市民科学協会 (The European Citizen Science Association) は、「市民は、貢献者、共同参加者、またはプロジェクトリーダーとして行動し、プロジェクトにおいて重要な役割を果たすことができる」と強調している。さらに、「市民科学者は、自らが望むなら、科学的プロセスにおける複数の段階に参与することができる。」と

⁶⁰ Serge Noiret and Thomas Cauvin, "Internationalizing Public History", Gardner, James, Hamilton, Paula (eds.), *Oxford Handbook of Public History*. Oxford, Oxford University Press, 2017, pp.25-43.

⁶¹ Rebecca Wingo, Jason Heppler, and Paul Schadewald, (eds.), *Digital Community Engagement: Partnering Communities with the Academy*. Cincinnati, University of Cincinnati Press, 2020.

⁶² Serge Noiret, "Digital Public History", David M. Dean ed., *A Companion to Public History*. John Wiley & Sons, Inc., 2018, pp. 111-124.

⁶³ Rick Bonney, Caren B. Cooper, Janis Dickinson, Steve Kelling, Tina Phillips, Kenneth V. Rosenberg, Jennifer Shirk, "Citizen Science: A Developing Tool for Expanding Science Knowledge and Scientific Literacy", *BioScience*. 59(11), December 2009, pp. 977-984.

続いている。⁶⁴ そして、これらの異なるステージや異なるタスクには、異なるスキルが必要とされる。市民科学は、一般の人々が持つ一般的な知識と、少数の人々が持つ専門的な知識、さらには正規の教育や長期間の実践を通じて得られる領域固有の専門的な知識を必要とするタスクとを区別する。これらを「the public」と一括りにして考えるのは、まったく誤っている。パブリックヒストリーのプロジェクトでは、参加者の知識、スキル、専門性に応じて、さまざまなタスクを割り当てる必要がある。その中には、参加者の大半ができる仕事もある。例えば、クラウドソーシングによる天文学のプロジェクト Galaxy Zoo では、参加者は一般的な知識を用いて、銀河の形などの基本的な特徴を判断する。一方、より具体的な知識を必要とする作業も存在する。インド・パキスタン分離独立に関する証言を集める国際プロジェクト 1947 Partition Archive では、歴史の目撃者にインタビューする参加者は、オーラルヒストリーの基本（専門知識）を習得するためのトレーニングを受ける必要がある。⁶⁵ したがって、参加型プロジェクトの開始時には、参加者が行うことのできるさまざまなタスクをリストアップし、求められる知識（一般的なもの、専門的なもの、領域固有のもの）とスキルを特定することが重要である。

デジタルパブリックヒストリーの主要な課題の一つは、参加者が、より複雑な歴史的作業に貢献しつつ、そこから学ぶことのできる方法を見つけることだ。デジタルパブリックヒストリーのプロジェクトの大半は通常、テキストを機械で読める形式に変換するためのテープ起こしなど、一般の人々の参加を基本的な作業に限定している。2010 年にユニバーシティ・カレッジ・ロンドンで開始された Transcribe Bentham は、最も人気のあるクラウドソーシングによる手稿翻刻プロジェクトの 1 つだ。この翻刻プロジェクトは、「ボランティアが歴史の仕

64 European Citizen Science Association, “10 Principles”, <https://ecsa.citizen-science.net/documents/>, (accessed 2023-01-25.)

65 Montserrat Prats López, Maura Soekijad, Hans Berends, Marleen Huysman, “A Knowledge Perspective on Quality in Complex Citizen Science”, *Citizen Science: Theory and Practice*. vol.5/1, 2020, pp.1-14.

66 “The 1947 Partition Archive”, <https://www.1947partitionarchive.org>, (accessed 2023-01-25.)

事に対する投資と参加の感覚」を感じることができるかもしれないが、一般的の参加はマイクロタスクに限定される。プロジェクトによっては、翻刻を参加者の学習プロセスと結びつけているものもある。特に、何らかの学習用インターフェースと組み合わせることで、「個人の歴史的な手書き文字を解読する能力」を向上させることができる。オーストラリアの歴史家アラナ・パイパーは、単純な「データを形づくる」ようなタスクから、"知識を形づくる"ようなタスクに関連した、批判的思考の育成に移行」せよと論じている。2018年に開始されたオーストラリアのプロジェクト *Criminal Characters* は、「1850年代から1940年代のビクトリア州の中央刑務所登録簿、囚人の職業、読み書き、出生地、家族・移住歴、前科、外見、刑務所内での経験などを詳細に記録した5万件以上の記録の翻刻を支援している。⁶⁷」Zooniverse のアーキテクチャを通じて、このプロジェクトでは、一次史料の種類や遭遇したデータについて、チュートリアルを一步一步学習することができるようになっている。また、日本のデジタルプロジェクトである「みんなで翻刻」⁶⁸（第19章参照）は、参加者に前近代的の地震の記録を翻刻するよう求めている。参加者の99%は、日本の古い筆記スタイルである、くずし字を読むことができない。そのためプロジェクトマネージャーは、クラウドソーシングプロジェクトに紐づいた学習アプリを設計した。⁷⁰

ジャーナリストのジョアン・パルマは、Covid-19パンデミックのさなかにユダヤ人がどのように暮らしていたかを記録したデジタル資料を収集する *American Jewish Life* に、「歴史の民主化によってそれが可能になった（...）歴史は誰の独占物でもない、本当に。それが全てだ」と喜びのコメントをしている。⁷¹ ユーザー主導型のプロジェクト *Pandemic Religion: a Digital Archive* は、確

67 Alana Piper, "Crowdsourcing : Citizen History and Criminal Characters", Paul Ashton, Tanya Evans and Paula Hamilton, ed., *Making Histories*. Berlin/Boston : De Gruyter Oldenbourg, 2020, p.205, 208.

68（訳者注）Zooniverse：自然科学から人文科学まで、さまざまな市民科学プロジェクトのための場を提供するプラットフォーム <https://www.zooniverse.org/>（2024年8月8日アクセス）。

69（訳者注）<https://honkoku.org/>

70 "Minna de Honkoku", website, 2021, https://honkoku.org/index_en.html, (accessed 2024-07-12.)

71 Joanne Palmer, "Democratizing history as we make it", *Jewish Standard*, (31 August 2020), <https://blogs.timesofisrael.com/democratizing-history-as-we-make-it/>, (accessed 2024-07-12.)

かにパンデミックをアーカイブするための重要な一步だといえる。しかしながら、オンラインコレクションの作成は、歴史的作業の一側面に過ぎないことを理解することが重要である。⁷² オンラインコレクションの作成は、歴史実践の一端に過ぎず、歴史実践のためには歴史の解釈も必要なのだ。2013年にフィエン・ダニアウは「デジタルパブリックヒストリーに関する問題は、画像の集積やオンラインコレクションが世界的に最も一般的で支配的なジャンルであること」であり、「コレクションは膨大でも、そこにある歴史は小さい」と結論付け警告している。⁷³ このような多様な参加形態から、参加者が新たな歴史的スキルを身につけるための、市民の歴史を発展させる必要があるという学者もいる。

デジタルパブリックヒストリーのプロジェクトでは、市民の参加は歴史的解釈ではなく、文字起こしなどの基本的な作業に限定されることが多い。歴史的解釈には、批判的分析、文脈の整理、論証が必要であり、シティズンヒストリアンにとってはそれらのスキルを身につけることはより困難である。「もっと多くの人が歴史家となることを応援する」ために、米国のホロコースト記念館(USHMM)が2007年に開発した Children of the Lodz Ghetto プロジェクトは、「ホロコーストの犠牲になった小学生たちの物語を再構築するために世界中の人々を募った。⁷⁴」このプロジェクトでは、1941年の学校アルバムを分析し、ホロコーストの犠牲になったウッチ・ゲットーの小学生の物語を再構成するために「シティズンヒストリアン」を募集したのだ。⁷⁵ プロジェクトマネージャーのエリッサ・フランクルは、「市民の歴史とは、アマチュアの学者や愛好家と向き合い、博物館が保有する権威ある研究や資料に基づいて、本質的な質問について考え、答えるものである。同時にそれは、新たな協力者がもたらす新しいアイデア、

72 Pandemic Religion: A Digital Archive, "Welcome", website, 2021, <https://pandemicreligion.org/s/contributions/page/welcome>, (accessed 2024-07-12.)

73 Fien Danniaw, "Public History in a Digital Context: Back to the Future or Back to Basics?", *BMGN - Low Countries Historical Review*. 128(4), (December 2013), p. 135.

74 Frankle, Elissa."More Crowdsourced Scholarship : Citizen History", *Center for the Future of Museums*, (28 July 2011), <https://www.aam-us.org/2011/07/28/more-crowdsourced-scholarship-citizen-history/>, (accessed 2024-07-12.)

75 United States Holocaust Memorial Museum, "Children of the Lodz Ghetto", website, 2021, <https://www.ushmm.org/online/lodzchildren/>, (accessed 2024-07-12.)

質問、考え方を開かれている」と説明しました。⁷⁶ このプロジェクトのために開発されたワークスペースの構造は、研究プロセスをより小さなタスクに分割することで一種の足場作りを行った。参加者は、史料と目の前にある問題との関連性を判断し、その意思決定プロセスを振り返るよう促された。市民の歴史プロジェクトは、参加者が史料に基づくスキルを身につけ、証拠を論拠に結びつけるのに役立つのだ。

USHMM のもう一つのプロジェクト History Unfolded では、「私たちは共に、1933 年から 1945 年の間に、全国の一般の人々が地元の新聞を読んで、ホロコーストについて何を知っていたかを明らかにすることができる。私たちは、シティズンヒストリアンのチームに参加して、学者、学芸員、そして一般市民と共有する新しい知識を発掘するためにあなたを必要としている」と論じている。参加者は、ホロコーストの時期のアメリカとヨーロッパで起きた出来事について、選ばれた 37 の事例を、デジタル新聞を用いてニュースや意見を調査した。プロジェクトマネージャーはこの調査について、「『シティズンヒストリアン』たちは、活動を通して、ホロコーストの歴史について学び、歴史研究に一次史料を使用しながら、ホロコーストに対するアメリカ人の知識と反応に関する既成概念に挑戦してきた」と結論付けている。⁷⁷

最後に、ラディカルな市民科学では、市民参加は研究課題全体のデザインにまで拡張可能である。ワインゴー、ヘプラー、シャーデヴァルドの 3 人は、最近出版した *Digital Community Engagement* の中で、コミュニティと共同で開始したプロジェクトをいくつか紹介している。⁷⁸ 例えば、学生非暴力調整委員会 (SNCC) の元メンバーは、「学術的文献における SNCC の不正確な表現に不満を持ち、元メンバーの声を中心としたデジタルプロジェクトを立ち上げるためにデューク大学に話をもちかけた。」という。デジタルパブリックヒストリープロジェクト

76 Elissa Frankle, "Making History with the Masses: Citizen History and Radical Trust in Museums", 2013, <https://archive.mith.umd.edu/mith-2020/dialogues/making-history-with-the-masses-citizen-history-and-radicaltrust-in-museums/>, (accessed 2024-07-12.)

77 History Unfolded, website, 2021, <https://newspapers.ushmm.org/>, (accessed 2024-07-12.)

78 Wingo, Heppler, Schadewald, *Digital Community Engagement*.

のリーダーたちは、「プロジェクトパートナーたちが、共通の目標に取り組み、共通の価値観を持っていたから」成功したと指摘している。元活動家のメンバー、アーキビスト、学者、そしてプロジェクトのスタッフたちは、SNCC と黒人自由闘争運動のボトムアップの歴史を、そして彼らが「内側からの歴史」(inside out) と呼ぶ、それを生きた人々によって指示・創造された知識を伝える活動に公式に参加した⁷⁹のだ。

結論として、パブリックヒストリーの発展とは、古くからある実践に基づきつつも同時に、パブリックヒューマニティーズやパブリックサイエンスへの一般的な転換の一部として理解されるべきだ。パブリックヒストリーの実践は、博物館、文書館、地方史研究会などの研究・解釈の場にも長く存在してきたが、最近のブームは、学術研究や研修の場が開放されている大学において起きている。種々の新しいコースや研修プログラム、プロジェクトやイベントは、大学における歴史学が多様化し、学際的なスキルやアプローチ、倫理観がますます必要とされていることを示している。パブリックヒストリーの分野は厳密に定義されているわけではなく、むしろ、異なる分野の学者や専門家たちが、過去に対する新しい理解や解釈を生み出すために出会い、交流し、協力し合うことができる柔軟で包括的な空間として機能している。そうすることで、この分野は集合知に対する大きな手助けになる。パブリックヒストリーは、研究、保存、解釈、コミュニケーションの、そしてまた大学、文書館、博物館、史跡、その他の公共空間との架け橋となる。パブリックヒストリーは、歴史をよりアクセスしやすく、より包括的に、より魅力的に、そしてより有意義なものにするよう、さまざまな人々に働きかけているのだ。

79 Geri Augusto, Molly Bragg, et al. "Learn from the Past, Organize for the Future: Building the SNCC Digital Gateway", Rebecca S. Wingo, Jason A. Heppler and Paul Schadewald, eds., *Digital Community Engagement*. University of Cincinnati Press, 2020, <https://ucincinnatipress.manifoldapp.org/read/digital-community-engagement/section/e597a18f-faf6-4786-8889-3a02b1906d85>, (accessed 2024-07-12.)